

P-241

月経処置における布ナプキン使用体験

葛飾赤十字産院 看護部

かぶともり
兜森ひとみ、斉藤菜保子、大森 昭子、石井かおり、
広畑早記子、内木 美恵

【目的】月経処置の選択肢を広げる一助とするため、布ナプキンを使用している女性の使用体験を明らかにすることを目的とした。

【方法】布ナプキンを使用しており調査協力を得られたA病院看護職員3人を対象とし、2010年12月～2011年1月、30分程度の半構成的面接を行った。内容はICレコーダーに録音し逐語録とし、内容をコード化し分析した。倫理的配慮として、対象者に要旨を書面で説明し、同意書を得た。また、A病院の倫理委員会の審査を受け1013番にて承認を得た。

【結果及び考察】1.月経教育の中で布ナプキンを紹介することは月経処置の選択肢を広げることにつながる。2.布ナプキンに関する情報入手媒体は、本・友人・インターネットであった。3.個々で布ナプキンの使用方法を工夫していた。保温目的で使用している者もいた。4.使用後の布ナプキンの洗濯方法はアルカリ剤に浸けおきすることで血液が落ちやすく、また殺菌・消臭作用のあるアロマオイルの使用が有用であった。外出先では乾燥防止と消臭作用のために浸けおきの水をスプレーしていた。5.布ナプキン使用者は経血を観察しており、健康状態をセルフモニタリングする事につながる。6.布ナプキン使用によって肌トラブルが改善した。7.月経に否定的な感情を抱いている人にとって、月経に対する気持ちが変化するきっかけとなっていた。8.布ナプキン使用時、漏れの不安や使用後の持ち歩きに苦慮するというデメリットがあるが、工夫で改善できていた。9.使用者は今後も使用し続けたいと考えていた。

【終わりに】対象者が3名と少なかった。今後事例数を重ねていくことで様々な使用体験が明らかにしたい。

P-243

ヘア・ネットを用いた酸素マスクの固定法の効果

小川赤十字病院 看護部

よこた さおり
横田 沙織、岡村 奈美、小林真由美、高山 弘子

【はじめに】酸素マスクは日常的に使用される医療器具の一つである。しかし、長期使用は患者にとって苦痛の原因であり、酸素マスクの装着拒否から十分な酸素効果を得ることが出来ないことがある。そこで、身近にあるヘアネットを代用した酸素マスクの固定法を考案し試みた。その結果、効果的な酸素療法を得られることが出来たのでここに報告する。

【分析】マスクのズレや外れ効果的な酸素療法が得られない誘因と考え、「マスクと肌の間の隙間、マスクを外そうとしていないか、発赤や傷の有無、意思疎通が可能か、安静度が守れるか」の5点について、通常のマスクとヘアネットマスクを比較し評価した。

【結果】十分に意思疎通できない18人の患者にヘアネットのマスクを配布し、通常マスクとの変化を比較した。その結果、6人の患者に酸素マスクと皮膚との間に隙間が見られたものが2人に減少し、Spo2値の平均値は94.3%から96.8%へ上昇した。対象者、1人にマスクを外そうとする行為が見られたが、ヘアネットに変えたことでその行為はなくなった。また、皮膚の発赤や傷の有無においては両者共に見られなかった。

【考察】従来の酸素マスクは、一本のゴムで耳から頭部の限られた部分を支えているが、ヘアネットを用いたことにより、酸素マスクを頭部全体で支えることができた。その結果、酸素マスクの隙間やズレが少なくなり、密着度が増し、Spo2値の値が高値となったのではないかと考える。また、耳にかかる負担も軽減され、外そうとする行為も減少したのではないかと考える。研究者を行うにあたり、ヘアネットを代用することで見た目に印象を懸念していたが、家族の「見た目より、確実に治療が行える方がよい」という意見を聞き、有効的な酸素療法を用いた治療を優先していることが分かった。

P-242

経管栄養チューブ自己抜去予防するための抑制具の見直し

盛岡赤十字病院 看護科

とくた ひろこ
徳田 裕子、田口沙耶香、伊藤 嘉子

【はじめに】当病棟の患者は脳血管障害により危険行動を起こすリスクが高く、安全を守る上でやむを得ず身体拘束を実施する場合がある。抑制の理由として最も多いのは経管栄養チューブの自己抜去予防である。私たちは経管栄養チューブに着目し、抑制する事で精神的苦痛の軽減、良肢位の保持、ADLの拡大を図りたいという気持ちから、新抑制具を作製しそれをスタッフに装着し、アンケートの結果から今後の抑制具改善のための分析ができたので報告する。

【目的】現在使用している抑制具の見直しを図り、実用化に向けて検討する

【方法】1.現在の抑制具使用についての意識調査2.新抑制具の試作3.新抑制具使用体験後アンケートを用いて評価する【結果】1.抑制に対する意識調査2010年7月1日～7月末期間 医療職23名2.新抑制具の製作病棟スタッフの抑制に対する罪悪感の軽減、患者の人権の尊重、ADL低下の緩和に重点をおき、新抑制具（肘付き胸帯・人形付き3本指グローブ・ポール付きグローブ）を作成3.製作した抑制具の使用体験による評価新抑制具を体験し、感想を援助者側、患者側の立場において自由記載してもらった

【考察】病棟スタッフへの意識調査の結果から、半数以上のスタッフがジレンマを抱えた中で抑制を行っている事を知った。以前の抑制に比べ患者の不安や精神的苦痛の緩和、良肢位に近い体位がとれた。今回の研究結果より、抑制時力の入る部位の強度力を高め、装着時に与える不快感の改善を目指し、患者の安全不安、援助者側からの使用感を考慮し、さらなる改善を重ねていく必要がある。

【終わりに】今回製作した抑制具はまだ改良途中であり、現在業者と打ち合わせ中であり、実用化に向けている。今後もADL低下防止にも目を向け、患者が安全・不安に治療を受けられるよう努力していきたい。

P-244

新しいカウント用紙を作成して

伊達赤十字病院 看護部

こにし やよい
小西 弥生

【はじめに】2009年、腹腔鏡下手術において、手術用ガーゼの体内遺残事故が発生した。当手術室では、出血量カウント・挿入物カウント・ガーゼカウントが1枚の紙にまとめた用紙を使用していたが、事故後の改善策の1つとして、上記の挿入物カウントをさらに具体的かつ記入しやすくした用紙を作成し併用した。しかし、これら2枚の用紙の内容が重複しており、見直しの必要性を感じ本研究に至った。

【研究目的】スタッフ全員が同じように記載でき、より使いやすいカウント用紙を作成し、体内遺残事故防止を図る。

【研究対象】当院手術室看護師11名

【研究方法】1.当院手術室看護師を対象に2010年4月現在使用しているカウント用紙に関するアンケート調査 2.アンケート結果を基にした新たなカウント用紙の作成 3.2導入後のカウント用紙に関するアンケート調査

【結果・考察】アンケート結果より、新しいカウント用紙は全員が使いやすい用紙とはならなかった。また用紙を変更したことで安全性が高まったと考えるスタッフは半数に過ぎなかった。従来の用紙を改善して作成したカウント用紙ではあったが、期待した結果は得られなかった。挿入物の記入はあくまで目安であり、用紙を使う側の意識に左右されること、体内遺残が起こるのは人的要因が主であるということを感じさせられた。カウント用紙変更だけでは体内遺残防止には不十分であり、手術に関わるスタッフ一人ひとりが体内遺残事故を起こさないという意識を高めていくことが重要である。今後はスタッフ全員が使いやすいといえるカウント用紙を作成していきたい。